梁塵秘抄

榎克朗 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第三一回）

梁塵秘抄（りょうじんひしょう）

昭和五十四年十月五日　印刷
昭和五十四年十月十日　発行

校注者　榎（えのき）　克朗（かつろう）

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

定価一六〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Katsurou Enoki, Printed in Japan, 1979.

目次

はじめに……三
巻第一……一一
長歌……一三
古柳……一六
今様……一七
巻第二……二三
法文歌……二五
四句神歌……一〇七
二句神歌……一八五
口伝集巻第一……二三三
口伝集巻第十……二三七
解説……二七一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

ここに来て梁塵秘抄を読むときは
金色光のさす心地する
と謳ったのは北原白秋ですが、後白河院の撰に成る『梁塵秘抄』が再び日の目を見てまだ間もないころのことでした。

平安末期の女芸人たちによって弘められ、「今様」と呼ばれた流行歌の集大成が『梁塵秘抄』で、不幸にも早く散逸して、永く幻の古典と化していたのですが、明治四十四年の秋、偶然「巻二」の写本が発見せられ、翌大正元年八月、活字になって世に出たのでした。

白秋はまた、先の歌と同じころ、

一心に遊ぶ子どもの声すなり
赤きとまやの秋の夕ぐれ

という歌を詠んでいますが、これは『秘抄』の第三五九歌、

遊びをせんとや生まれけむ
戯れせんとや生まれけん
遊ぶ子どもの声きけば

わが身さへこそゆるがるれ

にヒントを得たものであることは明らかです。

芥川龍之介も『秘抄』の熱心なファンで、

「ひとの音せぬ暁に

ほのかに夢に見え給ふ」

仏のみかは君もまた

「うつつならぬぞあはれなる」

この瀟洒たる恋愛詩は、全四行中三行までもが、左記『秘抄』第二六歌の絶妙な本歌取なのです。

ほとけは常にいませども

うつつならぬぞあはれなる

人のおとせぬあかつきに

ほのかに夢にみえたまふ

「遊びをせんとや」と「ほとけは常に」とは、『秘抄』中で今日最も人口に膾炙する歌ですが、ほかにも興味深い歌が数多く収められています。ただ、何分にも古い昔の作なので、現代人の好みに合いにくいと思われるものも相当含まれてはいます。老婆心から一言すれば、概して三百番台の歌の中に、「詩」としておもしろいものが多いのではないかという気がしますが……。

〔本文について〕

一、本文はすべて天理図書館所蔵（竹柏園文庫及び綾小路家旧蔵）の写本を底本とし、既刊の諸活字本を参考にしながら作成した。

一、歌集の部に収められた五百六十六首について、便宜のため諸注釈書と共通の通し番号を付した。

一、原本では、歌詞はみな散文風に棒書きになっているが、本書では適宜に行を分ち、近代詩のような体裁に改めた。また『口伝集』の文についても、適当に段落を切って読みやすくした。

一、原本は大部分ひらがなで書かれているが、本書では大幅に漢字をあてた。また、原本の旧漢字や異体漢字は、原則として今日通用の字体に直し、また誤字・宛字の類は正しい字に置き換えた。

一、原本の仮名づかいは相当乱れているが、原則として歴史的仮名づかいに修正統一した。ただし、若干の特殊な場合、及び助動詞「む」「ん」の表記のたぐいは、原文のままとした。

一、仮名には濁点を補った。また拗音・促音・撥音・長音に読まれたと思われる語については、原文の表記法を少し改めた。

〔例〕 さうし→生死　すみ→須弥　そさ→書写
さた→薩埵　すた→純陀　くし→窮子

ただし仏教語に多い連声は、中世以後の現象と見て、本文には採用しなかった。

〔例〕 りんゑ→輪廻（ただし頭注では「輪廻」とした）
てちゐ→鉄囲（ただし頭注では「鉄囲」とした）

一、原本、特に巻二には、意味の通じにくい個所が非常に多い。誤写と判断される個所については、(イ)本文を改訂した場合と、(ロ)本文はひとまず原文どおりに掲げ、頭注で私案を示した場合とがある。

一、奥書など、漢文体のものには、便宜上、返り点を付し、送り仮名を補った。

〔頭注・傍注について〕

一、新潮日本古典集成の方針に則り、頭注はなるべく本文と同じ見開き（偶数頁と次の奇数頁）に収まるよう配慮した。そのため、説明を幾分短縮ないし割愛した個所もある。

一、一般に現代仮名づかいを用いたが、古典を引用した場合は歴史的仮名づかいによった。また漢文の引用は原則として書き下し文に改め、送り仮名にはカタカナを使用した。

一、同じ語句が他の個所にも重ねて出る場合、(イ)繰り返して注を付けた場合もあるが、(ロ)その多くは「○○歌参照」のように処置した。

一、紙幅の制約上、記述を簡略にした場合がある。例えば、『法華経』方便品を詠じた歌の注に「経」とあれば、それは同経同品をさす。また地名や社名についても、旧新の両呼称を示したかったが、完全には実行できなかった。

一、学者によって解釈に相違のある場合でも、ほとんど触れ得なかった。反面、筆者自身の新見を思い切って提示した個所も多い。

一、意味不明の語句には、必ず「未詳」と注しておいた。

一、語句の訳注にあたっては、単に辞書的意味を示すに止めることなく、その文脈での意味合い、

ニュアンス、気分などが明確になるよう、特に心掛けた。

一、語句の意味さえ分れば、通釈を要しない歌が多いが、見開き二頁中に最低一首は全訳をセピア刷りで掲げた。訳に際し、三味線歌曲まがいの詞章を工夫してみたが、今様の主な歌い手が当時の女芸人だったことを思えば、あながちに奇矯（ききょう）の振舞でもなかろう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

梁塵秘抄

梁塵秘抄　卷第一

一　短歌の冒頭に「そよ」という囃し詞の加わったもの。『古今集』雑体の部に、『万葉集』でいう長歌を短歌と誤記して以来、本来の長歌を短歌、本来の短歌を長歌と呼ぶ習慣が生れた。藤原俊成の『古来風体抄』には、三十一字の歌は声を長く詠ずるので長歌というのであろう、と説明している。

今様としての曲調などについては未詳（以下の各種目みな同じ）。

二　本来は「小柳」で、おそらく草仮名の「古」が漢字に固定してしまったのであろう。なお目録には「三十四首」とあるが、実際には一首しか掲げられていない。

三　ここでは狭義の今様をさす。広義の今様（長歌・古柳・法文歌・神歌などをも含めた総称）と区別するために、「只の今様」「常の今様」と呼ばれることもある。なお目録には「二百六十五首」とあり、さらにそれが「春十三首」等々と細分されているが、実際には全部で十首しか掲げられていない。しかもそのうち四首は巻二所収の法文歌と重複している。

四　祝言の歌を最初に置くのは日本芸能の伝統。なお「塵」を詠み込んだ第一歌を巻頭に据えたのは書名の『梁塵秘抄』に因んでの処置と思われる。

1　お前さまには御全盛、幾久しくておわしませ。
　これを例えば、千年に　一たび塵が落ちとま

長歌一　十首

古柳二　三十四首

今様三　二百六十五首

春十三首　夏七首　秋十五首　冬九首

四季八首　二季八首　祝八首　月九首

恋十四首　思十二首　怨二十首　別四首

雑上七十六首
下六十二首

り、積もり積もって白雲の、かかる高嶺となるまでも。原作者は大江嘉言（『後拾遺集』賀）。原作は帯刀の陣（皇太子護衛官の詰所）での歌合に詠まれた和歌であるが、今様としては、原意にかかわらず、いろんな場合に、いろんな目的で、いろんな人物によって歌われた。中で遊女・傀儡子など、当時の女芸人が、貴族の宴席などで歌ったと想像される今様の相を、ひとまず標準と仮定し、できるだけその感じの出るように訳出してみた（以下同じ）。

◇そよ　囃し詞。民謡の歌い出しの「ハアー」などに相当するもの。◇君が代　「君」は広く相手をさし、必ずしも天皇や主君には限らない。「代」は一生・寿命の意。◇居る　とどまる。ここでは、浮遊していた微塵が沈着すること。

2　暦の上に春立てば、思いなしかや、雪深い　吉野の山もほんのりと、今朝はかすんでいるわいな。

原作者は壬生忠岑（『拾遺集』春）。今様としては、新春の御慶の気分を込めて歌われたものであろう。

◇春立つ　立春の日になる。旧暦正月・二月・三月を春とするが、元日と立春とは必ずしも一致せず、立春の方が数日早く来る年も多い。◇いふばかりにや（立春だと）いうだけのことなのに、早くも……のであろうか。◇み吉野　「み」は接頭語。吉野の美称。◇かすみて　春到来の徴候はまず霞に現れる。

長歌　十首

祝四

1

そよ　君が代は
千世に一たび　居る塵の
白雲かかる　山となるまで

春

2

そよ　春立つと
いふばかりにや　み吉野の
山もかすみて　今朝は見ゆらん

3　人待ち顔のわがやどの、梅の盛りに目をとめて、思いがけないお前さま、よくぞたずねてくだされた。
原作者は平兼盛（『拾遺集』春）。
◇やど　ここでは庭先の意。◇立ち枝　高く伸びた枝。春の歌として、当然その枝には花が咲いている。

4　原作者不明（『古今集』夏）。初夏の風情を歌っているが、あるいは「藤波」を女、「山ほととぎす」を男に見立てて歌われた可能性もあろう。
〔参考〕「わたしゃ真室川の梅の花コーリャ、あなたマタこの町のうぐいすよ。花の咲くのも待ちかねてコーリャ、つぼみのうちから通て来る」（山形県民謡「真室川音頭」）。
◇藤波　藤の花房が風になびいてゆれるさまを波に見立てていう語。「波」は「池」の縁語。◇いつか来鳴かん　いつ来て鳴くのだろうか。早く来て鳴いてほしい。

5　小さい秋が来たぞえな。目にはあらわに見えずとも、そよろに渡る秋風が、肌に心にひいやりと。
原作者は藤原敏行（『古今集』秋上）。あるいは「秋」に「飽き」の意を掛け、女が男の愛の冷却の気配を、ちらりとほのめかして歌ったかも知れない。
◇おどろかれぬる　はっと気がついたことよ。

6　原作者は源信明（『新古今集』冬）。初冬の風情を歌っているが、あるいは、男女後朝の別れの

3
そよ　わがやどの
梅の立ち枝や　見えつらん
思ひのほかに　君が来ませる

夏

4
そよ　わがやどの
池の藤波　咲きにけり
山ほととぎす　いつか来鳴かん

秋

5
そよ　秋来ぬと
目にはさやかに　見えねども
風の音にぞ　おどろかれぬる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com